

実社会につながった 学びを

インタビュー

神奈川県立瀬谷西高等学校
教諭
シチズンシップ教育・キャリア教育担当

黒崎洋介氏

高等学校



■学びからの逃走

学習院大学の佐藤学教授は「子どもたちが学びから逃走している」と指摘しています。今かなり多くの子が学ぶことから逃げている、と。授業中に居眠りしたり私語に走ったりするだけではなく、勉強時間や読書数が減少し、全体的に学ぶことから逃げてしまっている、と。確かに私もそれは感じていますが。学びからの逃走、意欲のなさがなぜ起きているかというと、昔みたいな「良い成績→良い大学→良い会社」

という大きな物語がなくなってしまったことが一つはあるだろうと思うんです。昔はそれがあったからこそ先生も授業ができたんでしょうけれど、今は一部の生徒にしか通用しない。二極化しています。中堅校以下の生徒たちだとそれは全然通用しませんね。何のために学ぶのかということを確認にしていけないと、逃げたまま戻って来ないですね。今はスマートフォンを通して結構何でもできてしまって、面白いことがたくさんある。学びに向かう力、学びへ

の意欲をどう意味づけるかという課題は非常に感じています。

佐藤教授によれば、昔は「学ぶ意欲の時代」で、頑張れば頑張るほど将来の安定は確保できたけれども、今は「学ぶ意味の時代」で、頑張って学ぶ意味を彼ら自身からわからないと学ばない、と。われわれ教員としても意味を提示していかないといけない。

昔はみんな大きな流れに乗っていたけど、今はそのシステムから降りてしまいうほうがいい感じになっちゃったりする。あまり上のほうの成績ではない子は、ヤンキーとまではいなくても、学校文化から降りちゃって地元の子たちとたむろしているとかアウトサイダー的な子たちとつるむとか。それで何不自由ないし、スマホがあれば困らない。今ここで満足している。やはり意欲の格差はあって、意欲が高い子は勉強も頑張るし、部活も頑張るんです。

大学も全入時代で、AO入試や推薦で入る子が多い。直前に少し小論文の練習をしてそれで入っちゃう、みたいな。そうすると、「こんなものか」と子どもたちは思っていますよね。今一般入試の割合はすごく低いですが、楽なほう楽なほうに逃げちゃうんですよ。頑張ることをしなくなる。

昔と違う学力が求められるはずなのに、大学がそれをきちんと評価して入学させるわけでもない。一生懸命覚える、知識を蓄えるという学力観から、いかにその知識を使って自分の意

見を述べたりプレゼンしたりできるかという学力観になってきていますが、それは決して悪いことではないと思います。しかし、例えば高校の3年間それを積み重ねてきたら、それを評価してくれるような大学入試でないと駄目なのではないでしょうか。

■キャリア教育とシチズンシップ教育

学びへの意欲がない、学ぶことから逃げている、自分はこのままでもいいや、というところから、いかにして意欲や自己肯定感を作っていくか。それはやはり、キャリア教育とシチズンシップ教育によってだろうと私は思っています。キャリア教育は自分のこれまでとこれからを描くことであり、シチズンシップ教育は自分と社会のあり方を考えていくことで、二つはセットで捉えるべき理念です。会社員などとして労働者になっていくと同時に社会の一員にもなっていくのだから、自分のことだけ考えているのではなく、社会の中に生きていく自分という視点も必要です。学校教育の理念としてキャリア教育とシチズンシップ教育を位置づけていくことが大事だと思いますね。今学んでいることに何の意味があるのかということに、これまでの学校教育は答えられてこなかったという気がします。なんとなく「将来の受験に役立つからこれやりなさい」とか、「これをやらなさいと進学できないからやりなさい」という、ある意味「脅し」

によって教育が進められてきたのではないか。学ぶことに自分が働くとか社会に参画するという意味合いを結びつけていかなければいけない。

それをいかに具体化していくかというのが今後の課題でしょうね。教室の外に出て、例えばインターシップを拡充させていく、あるいは教室内で模擬的なものをうまく使ってやってみて、といった取り組みなどですね。今、神奈川県立高校のインターシップは3日間くらいで短いので、もう少し長期的に、企業が課題を与えて企画を出させるといったことをしていかなければ、「お客さん」で終わってしまう。

前任校の湘南台高校では、シチズンシップ教育で選挙の模擬投票などを行っていました。体験してみると投票は意外に簡単なものだとわかったと。じゃあどうして実際の選挙では投票率が低いんだろう。投票率を上げるためにはどうすればよいかを考える。そして、例えばその提案を地元の選挙管理委員会にプレゼンする。そうした仕事を携わっている大人に自分たちの考えを提案してダメ出しを喰らう、とか。インターシップもそのようにしていけばどうか。学生にウケるカップラーメンを開発して、「こんなじゃ全然駄目だ」「しかもそのプレゼンはいったい何だ」みたいに言われたりするのが大事なのではないでしょうか。そうすると、「プレゼンの勉強をもっとしないといけない」とか「そもそも企業っ

てどういうところなんだろう」と思っ
て真剣に学びに向き合うようになる。
教育が実社会から切り離されすぎてい
るのは問題です。

■意欲とインセンティブ

昔は「良い大学、良い会社」がイン
センティブとして働いていたんでしょ
うけど、今はそれがなくなっている、
というか見えにくくなっていますか
ら、学びに向かう意欲が湧かない。新
しいインセンティブとして何を作って
あげるか、ということですね。

一方で、格差社会という現実がある。
新しい学力観と言われ、思考力、判断
力、表現力が大事です、といった時に
気をつけなさいといけなさいのは、高い所
得やステータスの親の子たちは取り組
むし、取り組む力も持っているの
で、そうした子たちが一層評価されていく
ことです。そうでない子たちの「負の
再生産」のようなことが起こるの
はよくない。生まれてくる環境は選べな
いので、本人がどうすることもできな
い面がありますよね。

それを教育で何とかしようというの
はおこがましいかもしれないですけ
ど、普通科高校重視の教育をどうして
いくか、ということですね。例えば農
業高校が人気だというのは、学ぶ意味
も見出しやすいからでしょう。普通科
高校ができる範囲での教育政策がキャ
リア教育だったんだろうと思います。
「総合的な学習の時間」も、本来は

自分でテーマを設定し、自分で情報を
集めて、自分で考える、という時間で
す。湘南台高校のシチズンシップ教育
では、社会の課題について自分なりの
考えを持ってみよう、それを友達と
ディスカッションしてみよう、とい
うところに重きを置きました。今後、瀬
谷西高校でもキャリア教育とシチズン
シップ教育を理念にして学校づくりを
進めたいと考えています。

また、教科の内容がどう社会につな
がっているのか、実社会の職業や産業、
政治・経済などを題材として考えてい
く。そこを切り口にしていく。学びの
内容が外へ社会とつながっていること
を体感させるしかないでしょうね。

■若者文化の今

今はスマホ一つあれば、面白いこと
がホントに多いですからね。ゲームや
LINEをはじめとして。そうすると
授業、勉強には目が向かない。休み時
間はみんなスマホを使っている感
じです。家でも部屋にこもっちゃえ
ばわかりませんから親も注意できな
い。社会に対する広い視野を持つとい
うことがなかなかできなくて、消費
者としての存在だけが肥大していく。

教育学者の広田照幸日本大学教授
は、しばしば若者文化は悪く捉えられ
るが、彼ら自身のアイデンティティの
形成には役立っているとおっしゃっ
ていますが、やはりもう少し実社会に
目を向けたほうがよいのではないかと

とも言われています。

「学校という装置によって大人の社
会から隔離され、消費主体としてのみ
彼らは実際の社会に接している」「学
校では大人として振る舞うことが猶予
され、彼らが大人の世界を実感してい
くのは専ら消費市場を通してである」。
だから「消費とは違うやり方で若者た
ちにもっとリアルな社会に触れさせる
必要がある」と。

教師としては、勉強か部活か行事か、
どれかに頑張ってくれればいいと思
うんですけど、どれも中途半端で、意
欲がない、という子はやっぱりかなり
いる。いかに実社会につながった教育を
実践していくか、ですね。

「頑張る」というのが偏在している、
一部に片寄っているのが問題ですね。
一部のエリート校では頑張ろうとい
う意識はまだにあるんだけど、そうで
ない学校では意欲が薄い。ますます格
差社会になってしまっている。格差
心配ですね。それを解決していくた
めには、家庭や社会の問題もあると思
いますが、教育の場で何かするとしたら、
頑張ろうという意欲を作ること。その
ためにはインセンティブが働くよう
なものを用意していく。具体的には、
キャリア教育とシチズンシップ教育によ
って実社会に目を向けさせるとい
うことですね。働く大人、社会の中
で課題の解決に頑張っている人た
ちに触れさせる、一緒に活動させると
ころまでできればいいですね。